



えと文

森田康子

霧のモンツア

長い歴史と、近代工業の副産物スモッグが堂々とした街並を、すっかり汚してしまったミラノに、モンツアという素晴らしい街が郊外にある。車で二、三十分のところ。そこには中世紀の建物もいくつもあるが、その呼び物はなんとといっても公園だ。約二千エーカー。うっそうと樹木が茂る。車がやっと一台すれ違える道が一本ゆるやかに走る。昔の宮殿の庭である。ゴルフ場や、モーター・レース場を示す立札が辻々に見える。牛、馬の放牧場、小川の流れてそって小さい古城のような水車小屋、競馬場らしいイギリス気取りの馬券売りの小屋。それをこもり茂ったという樹が隠す。

秋の終り、プラタナスの茶色い葉が一枚、また一枚落ちていった。霧の中にまだ数枚が残る。ちぢかむ手に手袋をはめて描きとどめよう。中学生らしい少年少女が二、三人、ふと自転車の足を止める。白い息。寒くなった少年が、一心に見守る少女をうながす。

「明日も又描きに來ますか」

「ひよっとしたら」

「ありがとう」

(昭33高女卒・画家)